李白と陶淵明

―李白における孤独感と淵明像を中心に―

西村諭

一

『唐宋詩醇』巻八の李白「月下独酌」詩の評に「千古奇趣従眼前得之。爾時情景雖復潦倒、終不勝其曠達。陶潛云『揮杯勸孤影』白意本此」とある。「潦倒」とは、落ちぶれるさまや志を得ないさま。「曠達」とは、自由奔放で物事にこだわらないこと。安旗氏はこの『唐宋詩醇』の評に基づき、「月下独酌〈其一〉」をさらに分析して、次のように述べている。[1]

「花間」の二句は潦倒、「挙杯」の二句は曠達、「月既」の二句はまた潦倒、「暫伴」の二句はまた曠達。「我歌」四句は、月と影との交歓の楽しみを表現し、曠達であるだけでなく、俊逸でもある。「永結」の二句はさらに想像を高遠にまで引き上げ、「飄然思不群」の風趣を示している。こうしてみると詩全体では「曠達」が「潦倒」よりもずっと多くを占めている。

安旗氏の分析しているように、「月下独酌〈其一〉」には「潦倒」と「曠達」の相反する趣が詠われており、「潦倒」であればあるほど、その反動として強く「曠達」へ向かう力を感じることができる。精神の飛翔と抑制が交わって表現され、その振幅の大きさが、孤独をより深い孤独として、また、快楽をより世俗を超越した快楽として、それぞれ伝えている。深い孤独感が底意としてありながら、作品全体として陽気な雰囲気を帯びているのは、李白の精神が、孤独をはね返すほど高く飛翔しているからであろう。

盛唐を代表する詩人李白は、その詩の中で「自従建安来、綺麗不足珍」(「古風」〈其一〉)と、六朝時代の詩風を否定する。しかしその一方で、李白が六朝詩人の影響を大いに受けていることもまた事実であり、宋の鮑照や南斉の

謝朓との関わりについてはしばしば指摘されている。[2] その中で、冒頭に挙げた『唐宋詩醇』にも指摘がある東晋の陶淵明もまた、李白と関わりの深い詩人の一人であったと思われる。そこで本稿では、李白における孤独感と淵明像を中心に、両者の関わり方を見ていきたい。なお、本稿で引用する李白の詩は、宋版『李太白文集』三十巻（静嘉堂文庫所蔵、「唐代のしおり」所収影印本）に依る。

二

「独酌」という設定で詠われた作品に「春日独酌二首」がある。その第一首（以下「春日独酌〈其一〉」と記す）を次に挙げる。

1東風扇淑気　東風　淑気を扇り
2水木栄春暉　水木　春暉に栄ゆ
3白日照緑草　白日　緑草を照らし
4落花散且飛　落花　散じて且つ飛ぶ
5孤雲還空山　孤雲　空山に還り
6衆鳥各已帰　衆鳥　各おの已に帰る
7彼物皆有託　彼の物　皆託する有るも
8吾生独無依　吾が生　独り依る無し
9対此石上月　此の石上の月に対し
10長歌醉芳菲　長歌して芳菲に醉わん

春の日、ただひとり酒を飲む情景を詠った詩である。始めの四句は、万物が春の気を得て栄える風景が詠われる。天を眺めやると、一片の雲は山に帰ってゆき、多くの鳥達もまた、それぞれねぐらに帰ってゆく。この情景に触れて李白は「彼物皆有託、吾生独無依」と自己の孤独感を確認させられる。ここでいう「彼物」とは、「孤雲」と「衆鳥」だけではなく、始めの四句で詠った春の風景も含めた、すなわち万物を指して言うのであろう。李白を取り巻いている満ち足りた世界と李白の孤独な姿の対比、この落差の激しさが、孤独をより深い孤独として伝えている。だが李白は、その孤独感によって自己の内面に深く沈潜するのではなく、月に向かって、むしろ積極的に精神を解放させようとしている。そこには、自適の境地を自ら創り出そうとする李白の精神の強さが見て取れる。「潦倒」と「曠達」の対比は、この詩についても当てはまろう。

ところで第五～八句目の表現は、次に挙げる淵明の作品を踏まえたものである。一篇は十二句から成るが、いま、終わりの四句は省いて引用する。

詠貧士七首〈其一〉

1万族各有託　万族　各おの託する有るも

2孤雲独無依　孤雲　独り依る無し
3曖曖空中滅　曖曖として空中に滅し
4何時見余暉　何れの時にか余暉を見ん
5朝霞開宿霧　朝霞　宿霧を開けば
6衆鳥相与飛　衆鳥　相い与に飛ぶ
7遲遲出林翮　遲遲として林を出でし翮
8未夕復来帰　未だ夕べならざるに復た来り帰る

「詠貧士」詩は七首の連作で、ここに挙げた〈其一〉（以下「詠貧士〈其一〉」と記す）は、淵明自らの「貧士」としての孤独や孤高の思いを述べた、七首の序詩をなすものである。『文選』巻三十の「雑詩」の部類には、七首のうち、この詩のみが収められている。そして、例えば『李白集校注』に「陶潜詠貧士詩：『万族各有託、孤雲独無依』是此二句所本」と指摘があるように、李白の「春日独酌〈其一〉」に見える表現が冒頭「万族各有託、孤雲独無依」の句を意識したものであることは明らかだ。

さて、「詠貧士〈其一〉」の「孤雲」について、『文選』の李善注に「孤雲喩貧士也」とある。貧士とはこの詩の場合、淵明自身を指すと考えてよいだろう。つまり、この詩における「孤雲」は、寄る辺なき孤独な貧士の比喩であって、それはすなわち淵明自身の投影でもある。五～八句目では、鳥を詠う。朝焼けに昨夜からの霧が晴れるとき、多くの鳥が連れ立って飛んでゆく。その中で、遅れがちに林を出た一羽の鳥が、夕暮れにならないうちに再び林に戻ってくる。李善は「衆鳥」について「喩衆人也」、また七～八句目については「亦喩貧士」と注を施している。これによれば、「衆鳥」に遅れがちに付いていったものの、夕暮れ前に独り林に帰ってきてしまった鳥もまた、淵明自身の投影である。つまりこの詩で淵明は、一片のちぎれ雲と、衆鳥からはぐれた一羽の鳥に、自分自身の姿を投影して詠っている。

李白が淵明の「万族各有託、孤雲独無依」の二句を、「孤雲還空山、衆鳥各已帰。彼物皆有託、吾生独無依」と四句に拡大して詠っているのは、踏まえているところの淵明の表現に、延いては淵明に、何かしら感じるところがあったからに違いない。そこで、淵明の他の作品を眺めてみると、「衆鳥」という語を用いた作品がもう一例ある。一篇は十六句から成り、ここでは冒頭の四句を引用する。

読山海経十三首〈其一〉

孟夏草木長　孟夏　草木　長じ
繞屋樹扶疎　屋を繞りて　樹　扶疎たり
衆鳥欣有託　衆鳥　託する有るを欣び

吾亦愛吾廬　　吾も亦　吾が廬を愛す

この詩は十三首連作の第一首目（以下「読山海経〈其一〉」と記す）にあたり、やはり序詩の役割を持つものである。この詩の第四句目では、安んじて身をあずけることのできる家があることの喜びと、その家を大切に思う淵明の心境が詠われている。その喜びの投影されているのが、直前の第三句目である。先の「詠貧士〈其一〉」では、「衆鳥」は自己と相容れない「衆人」のイメージであり、淵明にとってはむしろ対極にある、否定的なイメージをもって詠われていた。だが、この詩における「衆鳥」は、身をあずける場所があることの喜びを投影したものであって、「詠貧士〈其一〉」の「衆鳥」とは異なるイメージを持っている。

そこで、「孤雲」ならびに「衆鳥」というそれぞれの詩語について見ると、「孤雲」については、管見の及ぶ限りでは、淵明の「詠貧士〈其一〉」の用例が最初のものである。「衆鳥」については、早いものでは『楚辞』に見える。

衆鳥皆有所登棲兮　　衆鳥　皆登棲する所有るも
鳳独遑遑而無所集　　鳳独り遑遑として集まる所無し
（宋玉「九弁」）

王逸の注に「群佞並進、処官爵也」とあり、また、『文選』五臣の劉良注に「群邪皆有其位、賢才竄逐、独無所託」とあるように、「衆鳥」は邪佞のイメージを持って賢人と対比されている。衆鳥には託する所があって、鳳には託する所がないという対比で詠われていることも指摘できる。また、魏の郭遐叔「贈嵇康二首〈其二〉」には

衆鳥群相追　　衆鳥　群れて相追い
鷙鳥独無双　　鷙鳥（しちょう）　独り双（なら）ぶ無し
（『全三国詩・魏詩』巻八）

とある。「鷙鳥」は猛禽をいう。これは『楚辞』「離騒」に「鷙鳥之不群兮自前代而固然」[4]とあるのを踏まえたもので、俗人を「衆鳥」に、孤高の士を「鷙鳥」に喩えている。孤高の士の、孤高であるが故に世俗に合わないことを詠ったものである。

こうした用例から見ると、淵明の「詠貧士〈其一〉」における対比、すなわち、「衆鳥」とそこからはぐれた一羽の鳥の対比は、俗人と孤高の士の対比のイメージを継承したものだ。また、寄る辺のない「孤雲」には、ただ孤独な貧士であることの嘆きだけではなく、孤高の精神を持つが故に託する所がないというプライドが表れていよう。自己を鳳凰や猛禽のような鳥に喩えて自らに賢人のイメージを付加させているわけではないが、「衆鳥」と対比すること

によって、世俗の時流に同調しない孤高の志と、自己の生き方を守ろうとする強い意志を表している。それだけに、託する場所を得た喜びが「読山海経〈其一〉」の三、四句目に強く表れていよう。冒頭に挙げた『唐宋詩醇』に見える「潦倒」と「曠達」の対比は、淵明における「衆鳥」の語にも当てはめて捉えることができるかもしれない。

李白が淵明の別々の詩から「孤雲」と「衆鳥」を取り上げたのには、『文選』巻三十に、「詠貧士〈其一〉」に続けてこの「読山海経〈其一〉」が載せられていることが大きく影響していると思われる。「詠貧士〈其一〉」に見られる「万族各有託、孤雲独無依」という孤独感、二つの詩に共通して詠われている「衆鳥」、これが強く印象に残ったのであろう。

三

次に、淵明と李白の「孤雲」「衆鳥」の用例を比較し、両者の特徴を見ていきたい。

淵明は、「孤雲」に貧士、すなわち淵明自身を投影して、寄る辺のない孤独の象徴として詠っている。しかし李白は、たとえそれが人気の無い山、すなわち「空山」であっても、「孤雲」にもやはり帰る場所があると詠う。「衆鳥」についても、李白の用例は、淵明や『楚辞』等に見られる寓意的な表現をとるのではなく、あくまで景物として表現している。そして「孤雲」と同様に、その「衆鳥」もまた、集まっていたものがそれぞれ「各おの」にではあるが、やはり身を託す場所があって、帰ってゆく。つまりこの詩での「孤雲」と「衆鳥」は、孤独感を喚起させる風景として詠われているのである。

その孤独感を表した「吾生独無依」の句は、それが飾り気のない率直な表現であるだけに、かえって強い印象を与えている。また、もともと設定されている場は「独酌」、つまり李白ひとりの世界なのであるが、さらに「孤雲」も「衆鳥」も李白の視界から去ってゆき、ただ李白と「石上」を照らす月だけがあとに残されるように表現する。その結果、孤独な李白の姿がさらに際立つものとなっている。

ところで、淵明の「詠貧士〈其一〉」における「孤雲」や衆鳥からはぐれた一羽の鳥が、淵明自身の投影であることはすでに触れたが、それがどのような投影であるかといえば、それは、官職を退いて隠居することを志す自己の姿、延いては、自己の生き方を守ろうとする孤高な姿の投影である。そして「読山海経〈其一〉」における「衆鳥」は、故郷に帰って隠居し得た自己の姿そのものである。

淵明の作品には「鳥」が多く詠われ、大上正美氏が

淵明にとって「飛鳥」は「帰鳥」のイメージで歌われ、本然の姿に帰り休む、と哲学的意味を付与される。現実からの逸脱と神仙への憧れとして「飛鳥」を歌うことの多い魏晋の詩人たちに対し、淵明は自己の生活——帰り得た現実、作り得た現実を確認するものとして歌うのである。[5]

と指摘されるように、多くは「帰鳥」のイメージで詠われている。そしてその鳥は、自己の生き方を守ろうとする志と、その実現による安息の比喩でもある。

一方李白においては、仮にねぐらへと還っていく鳥を詠っても、それは李白にとって空間的にも精神的にも自分から遠ざかっていく「去鳥」のイメージであり、孤独感を喚起させるものとなっている。例えば「望木瓜山」詩に

早起見日出　　早に起きて日の出づるを見
暮看棲鳥還　　暮に棲鳥の還るを看る
客心自酸楚　　客心自から酸楚
況対木瓜山　　況んや木瓜山に対するをや

とある鳥は、「客心」を催すモチーフとして詠われているし、「春日独酌〈其二〉」詩に

長空去鳥没　　長空　去鳥　没し
落日孤雲還　　落日　孤雲　還る
但悲光景晩　　但だ悲しむ　光景　晩れ
宿昔成秋顔　　宿昔　秋顔を成すを

とある鳥もやはり、悲哀を催す契機となる、去っていく鳥である。つまり李白にとっては、自己の孤独な姿を表現するためには、「孤雲」も「衆鳥」も去ってゆくものでなければならなかったのである。このことは、やはり「孤雲」と「衆鳥」の語を用いた「独坐敬亭山」詩についても言える。

衆鳥高飛尽　　衆鳥　高く飛んで尽き
孤雲独去閑　　孤雲　独り去って閑なり
相看両不厭　　相看て両に厭わず
只有敬亭山　　只だ敬亭山有るのみ

この詩では、「孤雲」も「衆鳥」も李白の視界、さらに言えば、李白を取り巻く世界から消えるように去っていく。そのように詠うことで、李白と敬亭山だけの世界を創造している。そこには、静寂な時間と空間の中で、ひとり坐っている孤独な李白の姿がありありと浮かび上がる。この詩でもやはり「孤雲」と「衆鳥」を景物として詠い、それらが去っていくように表現することによって、李白の孤独な姿を印象付けているのである。

四

李白における淵明像について考えたい。

「春日独酌〈其一〉」における「孤雲」と「衆鳥」の語にはやはり、その奥に淵明の姿を窺うことができる。「孤雲」と「衆鳥」が帰ってゆく情景に対して、李白は「吾が生」を振り返っているからである。つまり、淵明の生き方と自己の生き方を比較しているのであって、そこには、李白が淵明と真正面に向き合った姿がある。表現としてはあくまでも景物として詠っているが、この二物は、紛れもなく淵明が自己を投影していたものであった。李白がこの二物を帰ってゆくと詠うところに、淵明が帰り得た人物であるとする、李白における淵明像が窺えるのではなかろうか。

李白が「春日独酌〈其一〉」において「吾生独無依」と独白したところの「吾生」とは、自己のあり方、自己の存在のあり方と言ってもよいだろう。つまりこの句には、ただ自分だけが落ち着く場所がないという、外的な状況に対する嘆きだけではなく、自己のあり方をどこにも確かめられない、自己の存在そのものの喪失に対する危惧も表されているように思われる。そして、自己のあり方をどこかに確かめようとする情熱が、自適の境地を創造していく源となっているのである。このように考える理由は、李白が淵明の表現を踏まえるその背景に、自分とは対照的に、帰り得た、すなわち、自己の本来的な生き方を獲得し得た人物としての淵明像が意識されていると思われるからである。例えば、淵明の作品中において、「吾生」という語が「帰去来兮辞」に見える。

木欣欣以向栄　　木は欣欣として以て栄に向かい
泉涓涓而始流　　泉は涓涓として始めて流る
善万物之得時　　万物の時を得たるを善みし
感吾生之行休　　吾が生の行くゆく休するを感ず

万物がしかるべき時を得て栄えている、その情景に触発されて自己の生を顧みる、という構造は、李白の「春日独酌〈其一〉」詩と同じである。ここで「善万物之得時、感吾生之行休」について、二通りの解釈が成り立つ。一つは、万物が時を得て栄えてゆく春の情景に触れて、かえって死に近づく自己を実感し、悲観するという解釈である。自然の永遠性と人間の有限性との対比であって、これはつまり、「休」を「死」の意味で捉えた解釈である。これは『文選』李善注に引く『荘子』刻意篇に「其生若浮、其死若休」とあるのを踏まえた解釈であり、五臣の張銑は「休

謂死也。言感吾人生行将死也」と、この解釈に立っている。この場合の「生」は、死の対である生命の意味となろう。龔斌氏は「行休：指年命将尽、与遊斜川詩『吾生行帰休』句同意。逸注：『行休、即将退休。』非是。」と指摘する。[6] この龔斌氏が引く「遊斜川」詩には

開歳倏五日　　開歳　倏ち五日
吾生行帰休　　吾が生　行くゆく帰休せんとす
念之動中懐　　之を念えば中懐動き
及辰為茲遊　　辰に及びて茲の遊を為す

と、「帰去来兮辞」の表現に通じる句がある。

さて、もう一つの解釈は、龔斌氏が否定するところの、逸欽立氏の「行休、即将退休」という解釈[7]である。これは、官をやめて退き、故郷に帰って休息することをいう。これによれば、万物が時を得て栄える情景に、自己の心境を重ねているものと解釈できる。つまり、帰隠することによって得た安らぎ、すなわち、自分本来の生き方を得たことを実感し、その喜びを春の情景に投影しているのである。逸欽立氏は、「遊斜川」詩の「吾生行帰休」についても、「帰休、帰而休息。」と注を施している。したがってこの場合の「生」とは、自分本来の生き方と、それによって得た自己の存在そのもの、という意味で捉えてよいだろう。

またさらに、『文選』李善注には「感吾生之行休」の句の出典として、先の『荘子』とともに、郭璞の「遊仙詩」に見える「吾生独不化」の句が挙げられている。郭璞の「遊仙詩」は全十四首、そのうちの七首が『文選』巻二十一に収められている。「吾生独不化」の句は、そのうちの第四首に見える。それを次に挙げよう。

六竜安可頓　　六竜　安んぞ頓むべき
運流有代謝　　運流して代謝有り
時変感人思　　時変じて　人の思いを感ぜしめ
已秋復願夏　　已に秋にして　復た夏を願う
淮海変微禽　　淮海は微禽を変ずるも
吾生独不化　　吾が生　独り化せず
雖欲騰丹谿　　丹谿に騰らんと欲すと雖も
雲螭非我駕　　雲螭は我が駕に非ず
愧無魯陽徳　　愧づ　魯陽の徳の
迴日向三舍　　日を迴らして三舍に向かう無きを
臨川哀年邁　　川に臨んで年の邁くを哀しみ
撫心独悲吒　　心を撫して独り悲吒す

郭璞の「遊仙詩」は、沈徳潜が「遊仙詩本有託而言。坎壈詠懐、其本旨也。」[8]と指摘するように、ただ仙界へのあ

こがれを詠うのではなく、自己の心境をもしのびこませた、詠懐的な面をあわせ持つ。そしてこの詩には、時間の推移に対する無常観が基調にあり、「吾生独不化」という表現には、単なる時間の推移に対する嘆きに留まらない、自己の形を変えてまでも自己の本来の存在を確かめようとする哀しい叫びがある。ここでの「吾生」は、生命の意味ではなく、自己の存在そのものである。

ひるがえって淵明の「感吾生之行休」について考えてみると、淵明が郭璞の用例を意識したかどうかは別として、生命とは違う意味の「生」による解釈もやはり成り立つ。少なくとも李白は淵明の「善万物之得時、感吾生之行休」の句を、淵明が自分本来の生き方を獲得し、自己の存在を自ら確かめ得た喜びが、万物が栄える春の景物に投影されて表現されていると捉えたのではないか。つまり李白は淵明を、自己の本来的な生き方を獲得した人物と捉えているのである。このことは、次の章で挙げる李白と淵明の作品の比較を通して、明らかになると思う。

五

李白の作品中、「春日独酌〈其一〉」詩のほかに、「吾生」という表現を用いた作品がもう一例ある。「秋夕書懐」という作品である。

1北風吹海雁　北風　海雁を吹き
2南渡落寒声　南渡　寒声を落とす
3感此瀟湘客　此れに感ず瀟湘の客
4凄其流浪情　凄其（せいき）　流浪の情
5海懐結滄洲　海に懐う　滄洲に結ぶを
6霞想遊赤城　霞に想う　赤城に遊ぶを
7始探蓬壺事　始めて探る蓬壺の事
8旋覚天地軽　旋（つい）で覚ゆ天地の軽きを
9澹然吟高秋　澹然として高秋に吟じ
10閑臥瞻太清　閑臥して太清を瞻（み）る
11蘿月掩空幕　蘿月　空幕を掩い
12松霜晧前楹　松霜　前楹に晧（しろ）し
13滅見息群動　見を滅して群動息（や）み
14猟微窮至精　微を猟して至精を窮む
15桃花有源水　桃花　源水有り
16可以保吾生　以て吾が生を保つべし

一～四句では、自己の流浪する境遇について痛ましく振り返っている。しかし一転して五～八句では、神仙に思いを馳せることによって世俗を超越した心境に至り、先ほどまでの痛ましい情から解き放たれる。そして李白を取り巻

く世界はやがて、静寂な世界へと化してゆく。心静かに秋の気を感じながら歌を口ずさみ、のどかに寝転んで秋の空を見上げる。つたの間から洩れる月の光。その明かりに包まれた、自分以外に誰もいないとばり。建物の柱に白く映える松に降りた霜。「滅見息群動」は、日が暮れて、天地間のもろもろの活動が停止することをいう。「猶微窮至精」は、久保天随氏によれば「宇宙の本体たる至精を窮めること」によって「塵縁を断って物外に遊」ぶこととされる。[9] このような世俗を超越した世界を、別天地の桃源郷に見立てる。

李白はこの詩において、客心を催すものでしかない眼前の寂しい風景を、積極的に精神を飛翔させることによって、自適の境地へと転化させている。本稿冒頭に挙げた「潦倒」と「曠達」の対比がこの詩にも窺えよう。そしてこの理想の世界においてのみ、自己の生はやすんじ守られるのだと、末二句に詠っている。

さて、「春日独酌」の「吾生」がそうであるように、この詩の「生」もまた生命の意味ではなく、自分本来の生き方と、それによって得た自己の存在そのもの、という意味であろうと考えられる。すなわち、「この自適の境地においてのみ、私は私の本来の生き方と、私の存在そのものが守られることを実感できるのである」という解釈となろう。なぜなら、この詩もまた、次に挙げる淵明作品中の表現を踏まえたものだからである。

1秋菊有佳色　秋菊　佳色有り
2裛露掇其英　露に裛う其の英を掇る
3汎此忘憂物　此の忘憂の物に汎べ
4遠我遺世情　我が世を遺るる情を遠くす
5一觴雖独進　一觴　独り進むと雖も
6杯尽壺自傾　杯尽き　壺　自ら傾く
7日入群動息　日入りて　群動息み
8帰鳥趨林鳴　帰鳥　林に趨きて鳴く
9嘯傲東軒下　嘯傲す東軒の下
10聊復得此生　聊か復た此の生を得たり

この詩は「飲酒二十首」の第七首で、『文選』巻三十には「雑詩二首」の第二首目として収められている。[10] この詩で淵明は、菊の花を酒に浮かべて飲むことによって憂いを忘れ、世俗とは違う次元の世界に入ってゆこうとする。時はあたかも万物が昼間の活動を停止して憩う静かな夕暮れである。李白の「滅見息群動」の句が、この詩の「日入群動息」を踏まえたものであることは疑いないだろう。「帰鳥」はやはりこの詩においても、帰隠する自己の姿を象徴

している。「嘯傲」について、一海知義氏は「束縛から解き放たれた心境をあらわすことばであろう」とされる。[11] また、大上正美氏は終わりの四句を挙げて、

このひそやかな「日入」時間に、いまこうして生きてある自分の生を、ささやかではあるが、ほかでもない自身が確かめ得た、その喜びをかみしめている。

と指摘される。[12] つまりこの四句は、静かな夕べのひと時、自分本来の生き方を回復し得たことの喜びを表現していよう。李白の「可以保吾生」の句が、この詩の「聊復得此生」を意識しての表現であろうことは想像に難くない。すなわち、李白における淵明像は、自己の本来的な生き方を獲得し得た人物であって、その淵明に対し、自分もまた自分本来の生き方を獲得したいという情熱が、精神を飛翔させるエネルギーとなって、眼前の寂しい風景を自適の境地に転化させたのである。

六

李白の「秋夕書懐」詩と淵明の「飲酒二十首」の第七首の二つの詩を比べると、世俗とは違う次元の世界においてこそ、自分本来の生き方を確認することができるのだと詠うのは、両者に共通することである。しかし、淵明は飲酒によって世俗を脱した自適の境地に至るのに対し、李白は神仙に思いを馳せること、すなわち精神を高く飛翔させることによって、自ら自適の境地を創り出しているという違いがある。換言すれば、淵明は与えられた世界に美を見出し、飲酒によって自らの内面世界に理想郷を創り出す。一方李白は、与えられた世界が満たされないものであっても、それが理想郷へと転化するよう、積極的に精神を飛翔させる。つまり、世界そのものを変えてしまうのである。そして、その理想郷においてはじめて、自己の存在を確認しようとする、すなわち、「吾が生」を獲得しようとする。

「春日独酌〈其一〉」において「孤雲還空山、衆鳥各已帰」と詠った時、李白は「孤雲」と「衆鳥」に、自分本来の生き方を得た淵明を見ていたはずである。「万族各有託、孤雲独無依」と詠った淵明に対し、「孤雲」たる淵明もまた故郷に帰り、「衆鳥」と共に自己の生き方を確かめ得たではないか、と。それと同時に、寄る辺なき我が身を確認させられる。だが李白は、その孤独感にさいなまされるのではなく、世界そのものを変えようとする。そこには、逆転の発想が見られる。つまり李白においては、孤独であることが、自適の境地を創造し、自得の状態へ導くための条件

となっているのである。このことは、他の詩においても、李白が積極的に精神を飛翔させることによって、自適の境地を創造しているところに窺えよう。ここに、孤独であることを悲観するのではなく、むしろ楽観へと転化させる李白の精神の強さが見て取れる。

吉川幸次郎氏は、「中国文学に現われた人生観」[13]の中で、次のように述べている。

絶望すべきものとして、それまでの詩人が歌いつづけて来た人生、また事実そのようにも見える人生、それをいかにして希望あるものとして見る見方に転換すべきか、この苦悩が唐詩の高潮を生んでいる。

注

(1) 安旗『李詩咀華—李白詩名篇賞析』(北京十月文芸出版社、一九八四、一四四頁)
また「月下独酌〈其一〉」詩の全文は次の通り。
花間一壺酒、独酌無相親。挙杯邀明月、対影成三人。月既不解飲、影徒随我身。暫伴月将影、行楽須及春。我歌月徘徊、我舞影零乱。醒時同交歓、酔後各分散。永結無情遊、相期邈雲漢。

(2) 李白と鮑照の関わりを論じたものに、向嶋成美「李白と鮑照」(『漢文学会会報』三十一、一九七二)があり、李白と謝朓の関わりを論じたものに、松浦友久「李白における謝朓の像—白露垂珠滴秋月—」(『中国古典研究』十三、一九六五)がある。

(3) 瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』(上海古籍出版社、一九九八)

(4) 王逸注に「言鸞鳥執志剛厲、特処不羣、以言忠正之士、亦執分守節、不随俗人。自前代固然、非独於今。」とある。

(5) 大上正美『阮籍・嵇康の文学』(創文社、二〇〇〇、三七九頁)

(6) 龔斌注『陶淵明集校箋』(上海古籍出版社、一九九九)

(7) 逯欽立注『陶淵明集』(中華書局、一九九九)

(8) 『古詩源』巻八

(9) 久保天随『続国訳漢文大成　李太白詩集』(国民文庫刊行会、一九二八)

(10) 淵明の「詠貧士〈其一〉」と「読山海経〈其一〉」詩は、この詩に続いて『文選』に収められている。

(11) 一海知義注『陶淵明』(岩波書店〔中国詩人選集4〕、一九五八)

(12) 同注(5)(三四〇頁)

(13) 吉川幸次郎『文明のかたち』(講談社、一九六八)

(筑波大学大学院)